

## 第2章

まち

まちに住む

# 娘にとつては

# ここがふるさと。

# 長く住まわせたい

### ◆緑区／青葉台

田丸哲郎さん(37)、洋子さん(37)

## 転校生が多いまち

緑ゆたかな田園風景に包まれていた北部一帯に開発の波が押し寄せてきたのは、昭和二十年代に入って間もなくのこと。首都圏のドーナツ化現象による人口急増を受けて、東急電鉄は北部の宅地開発に乗り出す。その開発の出発点となったのが、東急田園



「青葉台を娘の心のふるさとに」と語る、田丸さんご夫妻

都市線青葉台駅周辺である。

まちが生まれてからそろそろ三十年。いかにも大型開発による郊外住宅地らしい、しやれた店の並ぶ駅前商店街も、どことな風格をにじませるようになってきた。

新居を探すため田丸哲郎さん・洋子さん夫妻が初めて青葉台を訪れたのは平成元年。入つてのうわさで「田園都市線の沿線はおしゃれで住みやすいまちが多い」と聞いてやつてきたのだ。お二人の第一印象は「若いまち」。「転勤族には、こういう新しいまちのほうが暮らしやすいんです。古くからあるまちは容易に溶け込めませんか」と哲郎さん。通信社の科学部記者である哲郎さんの勤務地に合わせ、各地を転居してきた一家は、新住民の多いこのまちの開放的な空気が気に入ったようである。

ご夫妻が一人娘の良子さん(10)と住むマンションは、二〇世帯の入居者がほぼ同世代



郊外住宅地として開発された青葉台周辺は、整然としたたすまのまち。

の転勤族。さまざまな面で、典型的な緑区民たちといえそうだ。

緑区は転出入者が横浜でいちばん多いところ。その多くは三十代を中心にした比較的若い層である。また、帰国児童・生徒が多いのも特徴という(平成四年「市立学校現況」)。哲郎さんも「このマンションでも最近、二家族が海外赴任で外国に行ったし、お隣りはアメリカから帰ってきたばかりで、お子さんはまだ日本語が上手に話せないんですよ」と、事もなげに語る。良子さんの通う小学校でも転校生が多く、それ

海外から、あるいは海外へというケースが目立つそうだ。

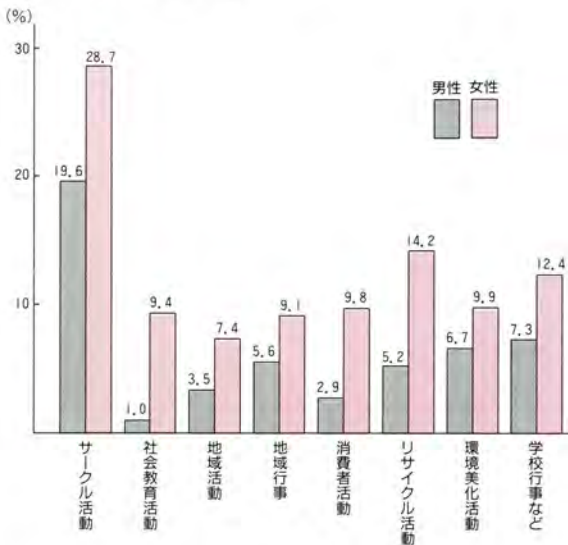
### ●まちの名の由来●

青葉台…「新しく生まれる、これから発展するまちの名前にふさわしい」との考えから、昭和41年に開業した東急田園都市線青葉台駅の駅名を地元要望により採用した。

## 地域への関心薄い男性たち

青葉台の女性たちはいきいきと、个性的にまちの中を動き回っている。高学歴の主婦が多いこのまちでは、カルチャーセンターがよいは卒業して、それぞれの才能を生かしたビジネスやイベント活動、ボランティア活動などに取り組み女性が目につく。洋子さんも、そんな主婦のひとり。マンションでは生協活動に参加しており、「年に何回かは、それぞれのお宅をもちまわりで、試食会を兼ねたパーティーも開いています」と、まずは身近なお付き合いを大切にしているようす。さらに自治会活動やPTAの役員(広報委員)、ママさんバレーボールのチーム「田奈クラブ」にも所属して、人脈を広げている。最近では看護婦の資格を生かして、月に何度か保健所のパートの仕

●この1年間に、積極的に参加した活動  
(新区計画区民意調査・平成4年)





緑区では地域活動も盛ん。活動を通じて交流の輪が広がる。写真は、「国際交流ラウンジ」の一コマ



青葉台駅前。昭和41年に同駅が開業して以来、まちの成長の拠点として、着実に発展を遂げてきた

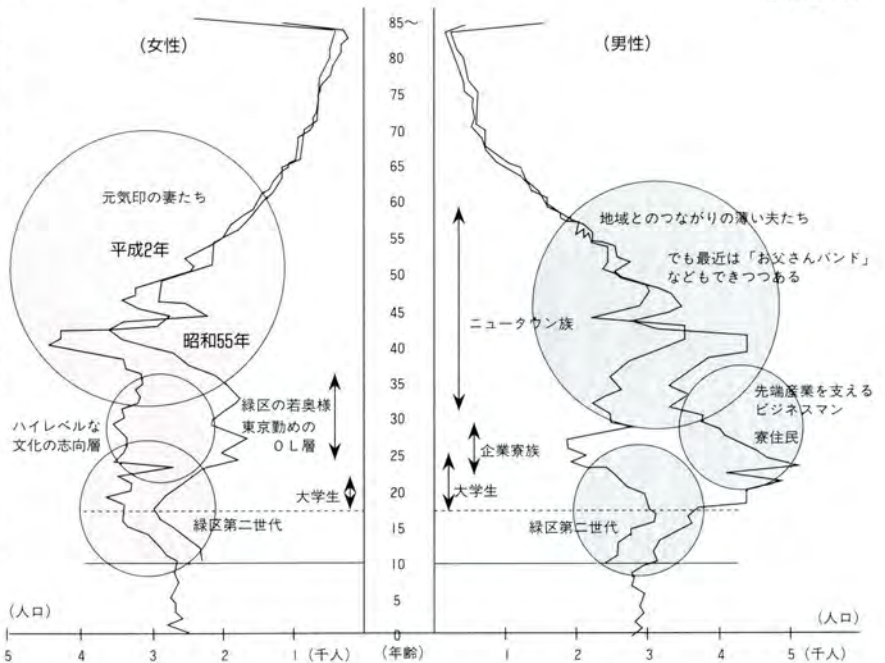
事にも出かけていく。  
 「いろいろな人と交流できて、世界が広がるのがいいですね。積極的な性格ではないといながらも、地域でめいっばい活動して、充実感のある毎日を送っているようだ。いま洋子さんの楽しみは、青葉台にデパートと、区民文化センターができること。これで東京まで買い物に行かなくてもよ

くなるし、まちに文化的な厚みが出ますから」と。  
 一方、田園都市線で通勤する哲郎さん

(国勢調査より)

がいつも感じるのは、「乗っている男たちが、年齢層から服装の好みまで実によく似ているんですね」ということ。東京勤めのホワイトカラー層が大半を占めるこのまちでは、男性たちはあまり個性的とはいえないようだ。  
 みんな早朝に出勤し、帰宅するのは深夜。まちにはほとんどいない。哲郎さんも朝は早くはないが、帰宅するのはたいに夜の十一時過ぎ。大半の男性たちは、横浜とはベッドでしかたがっていない。いまは地域との関わり合いの薄い男性たちも、いずれ地域に戻らなければならぬ。東京に向けていた目を地域に転じたとき、「横浜都民」にはどんなまちが見えるのだろうか。  
 緑区の住民の定住意向は六割近いが、横浜市全体から見ると低いのは、通勤族が多いせいだろう。しかし、青葉台生まれの子どもが立派に成人するまでになったいまでは、住民の間に「わがまち、青葉台」と

●緑区の人口構成とその変化



いう意識も芽生えはじめている。この地に住んで五年目の田丸さん一家がふるさと意識を持つにはまだ時間がかかるようだが、青葉台で小学校に入学した良子さんは、最近になって「浜っ子」を自称しているという。  
 「思春期の多感なときに住んでいたところが心のふるさとなるのだから、娘にとっては横浜がふるさとなんです」  
 だから、もうしばらくは転動しないで、娘をこのまちに住まわせてやりたい、哲郎さんの顔にはそう書いてあった。

## 第2章

まちに住む

# 庶民のまちの

# 三代目が

# 再開発に託す夢

まち

### ◆戸塚区／戸塚西口商店街

加藤武男さん(50)

### 町内全員で祝ってくれた結婚式

「いまの西口商店街には特色がない、だから若い世代がこないんです」

ため息をひとつつきながら商店街の現状を語る加藤武男さんは、JR戸塚駅西口、旧東海道沿いで「紀久薬局」を経営する、まもなく創業九十周年を迎えるという老舗の三代目である。

その旧東海道沿いと旭町通りを中心とする戸塚西口商店街は、「庶民の台所」として賑わっているところ。小規模な店が多いこの商店街では、路地を入ると食料品店や日用雑貨の店などが軒を接し、威勢のいい売り手のかけ声が終日通りに響いている。この庶民のまちにも、いよいよ再開発のときがやってきたようだ。

戸塚には、さまざまな顔がある。「宿場



再開発による活性化が期待されている戸塚西口商店街。文化的色彩も加わった、特徴のある商店街づくりが模索されている。

#### ●まちの名の由来●

戸塚…富塚八幡の社の上に古墳があり、これを「富塚」といったことに由来し、「富」が「戸」に転訛したという。

町の面影を残す庶民的なまち、「内陸工業地帯として大きな工場が目立つまち」、「大型団地や住宅地の広がるまち」、「田畑が多く自然の豊かなまち」、「横浜の副都心として都会化されたまち」。この多面性が戸塚の特色であり、それはこのまちの成熟度を表しているといえるのかもしれない。

ここで生まれ育った加藤さんは、当然のことながらまちの隅々までを熟知している。「買い物は全部ここで済ませます。飲みにもいくのも地元。どこにいけばどんな仲間がいるかわかっていますからね。歩いて帰れるのも地元の強味ですよ」。

加藤さんが町内の人から名前を呼ばれるときは「タケちゃん」である。もちろん加藤さんも愛称で呼び返す。子どもの頃、近くの柏尾川や寺の境内で、六年生をガキ大将に、一年生から六年生までみんな一緒に泥だらけになって遊んだ。そんな遊びの場

を共有しあつた幼なじみがいるから、現在も町内の結束は固い。

同じ町内ではないが、妻の静江さん(48)は小学校の同窓生の間柄。結婚式には町内の一〇世帯全員が出席して祝ってくれたというからすごい。その結束は現在も続いており、最近も町内の人の結婚式にやはり町内全員が出席したという。

そんなまちが大好きで、そんな自分の思いを子どもたちにも伝えたいから、加藤さんは二十二年間にわたって青少年指導員を務めてきた。

### 庶民の台所から文化の香りがつつまちへ

指導員を始めた最初の頃は、子どもたちの反応もよく、やりがいがあった。しかし、まわりの自然の減少につれて、家でテレビを見たり塾に通う子が増え、参加者が目に



▲創業当時の紀久薬局

▶創業90周年を迎える老舗、紀久薬局の加藤さん夫妻。まちの移り変わりを店先から見つめ続けてきた



みえて減っていったという。いま、子ども数自体が少なくなる中で、遊びを通して培われる子ども同士の結束が希薄になっていることが、加藤さんには気掛りだ。さらに気がかりなのは西口商店街の衰退である。かつては市内第四の売上げを誇っていた商店街も、横浜都心や藤沢駅周辺に



東口再開発ビルを軸に、まちづくりに取り組む東口地区

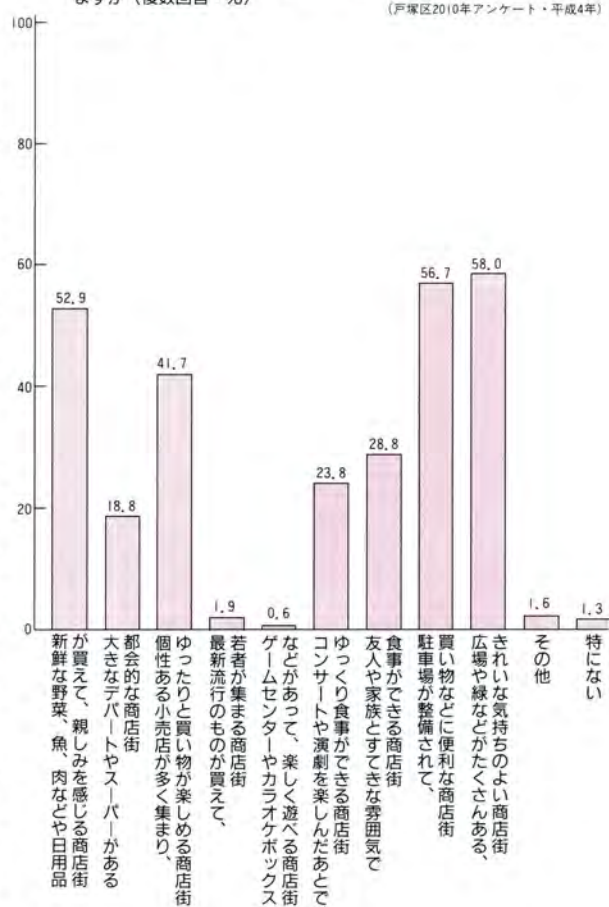
商圏を奪われ、売上げが伸び悩んでいる。原因のひとつが駐車場の少なさ。「車で買い物」がライフスタイルになった昨今、これは無視できない問題である。まちの再開発にもう背を向けてはられないのが現状だ。東口の再開発に遅れをとった西口周辺に対し、権利者の七割以上もの人が再開発を進めることを支持している(平成五年「戸塚駅西口の街づくりアンケート調査」)。

だが、再開発に不安を覚える人もいる。大規模資本の出店により、現在の出店者が営業を続けられないかもしれない。さらに、業種によっては大型店舗に向かないものも出てくる。さまざまな問題は、どれも生活の根幹に関わるものであるため、再開発を簡単には進められないのも確かだ。

それぞれの思惑に揺れ動いている戸塚だが、ここ戸塚駅周辺地区は横浜市西南部に

●2010年頃に戸塚駅周辺はどんな商店街になっていたらよいと思いますか(複数回答・%)

(戸塚区2010年アンケート・平成4年)



おける交通・商業などの中心地であり、市の構想の中では市の副都心として位置づけられている重要なところ。そのため、再開発によってさらに商業・業務・文化施設などの集積を高め、魅力あるまちづくりを進めなくてはならない。

庶民の台所のよさを十分認めながらも、「もっと文化的な色彩も加えて、ゆとりと個性のあるまちにしたいですね」という加藤さんは、いま積極的に再開発に取り組んでいる。

時代の流れの中でまちは変わってしまっただろうが、せめて人間味あふれるこのまちの、人と人とのつながりは大事にしたいと加藤さん。「戸塚のよさを、何かひとつでも次の世代へ伝えていきたいんです」と、「ふるさと」戸塚への愛情はゆるがさない。

## 第2章

まち

まちに住む

# ゼロからの 地域づくり

## 旭区／左近山団地

品田清一さん(54)

### 倍々ゲームの人口増

磯子区生まれの品田さんが左近山団地に移ってきたのは、団地完成の半年後。結婚して住んだ寮が狭く、なんとか公営住宅に移ろうと、数えきれないほどの応募と落選を重ねたあげくのことだった。

六畳一間の生活から、憧れの3DKに移った直後の感想は、「やれやれ、という感じでしたね」。しかし、やれやれと一息つ



連合自治会長として東奔西走の活躍をする品田さん

いてあたりを見回してみたら、交通の便が悪い、学校、病院、公共施設が足りない、緑がゼロで殺風景、と問題が山積していた。急激な人口増に、行政の基盤整備が追いつかない時代だった。

昭和三十年代後半から始まった高度成長は、首都圏に膨大な人口を引き寄せ、横浜も急激な人口増加に見舞われる。毎年一〇万人単位で膨張する市民に向けて、市内各所で宅地開発が活発化。住宅公園などによる大型団地の建設も次々に進み、四十年代にそのピークを迎えた。昭和四十三年に完成をみた左近山団地も、そんなマンモス団地のひとつである。

相鉄線二俣川駅からバスで約十五分。山を切り開いた土地に五階建てを中心とした建物が立ち並ぶ団地には、公団（二〜九街区）とお隣の市営住宅（市沢団地）を合わせておよそ五二〇〇世帯、二万人が住む。



恒例行事としてすっかり定着した「ふれあいフェスティバル」。住民にとって左近山の行事は「ふるさと」「わかまち」と実感できる一大イベントだ。

団地内には小、中学校のほか、商店街、郵便局なども完備され、まさにひとつのまちのおもむき。建物の周りは街区ごとにツツジ、サクラ、カシなどが植えられ、よく手入れされたようすに、この団地の自治会活動の活発さがうかがえた。

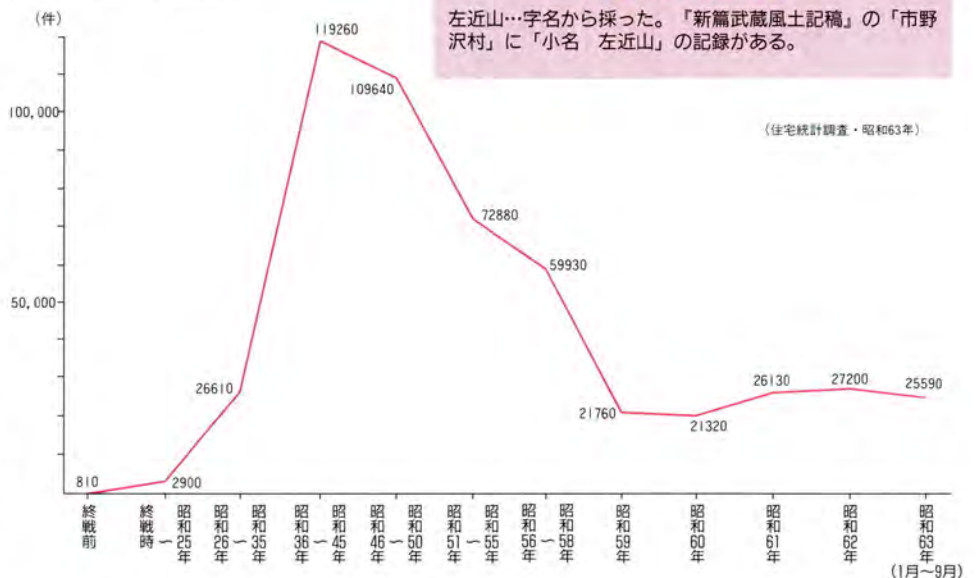
この印象がそう外れてはいないことを、左近山連合自治会会長の品田清一さんにお会いして、納得。一年三百六十五日を自治会活動にいそいでいる品田さんは、いまや自治会会長が本職のような人。土日の休みも有休もすべて自治会活動にいそいで、出勤前、帰宅後も自治会に出かけ

### ●まちの名の由来●

左近山…字名から採った。「新篇武蔵風土記稿」の「市野沢村」に「小名 左近山」の記録がある。

(住宅統計調査・昭和63年)

### ●建築の時期別共同住宅数



地域づくりは自分たちの手で。多くの問題をみんなの力で解決してきた

## 豊かなふるさとづくりに奔走する品田

ていく。忙しい仕事の合間も自治会のこと  
が頭を離れない。それだけ地域づくりは大  
変で、また手心えのあるものなのだろう。

最初は「自治会なんて好きなやつがやれ  
ばいいのさ」と、地域を自分たちでつくる  
という発想は全然なかったという品田さん。



自治会が中心となってまちの基盤を築き上げた左近山団地

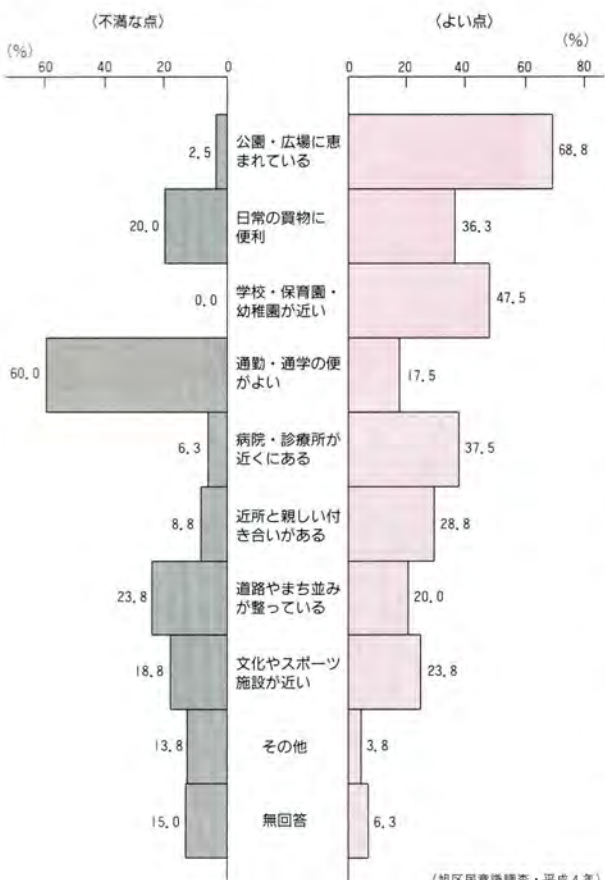
「地域づくりは、  
住民全体の協力が  
なくてはうまくい  
かないんですよ」と、品田さんはこ  
の団地の結束力を  
強調する。さまざま  
な問題が住民の  
関心を自治会に向  
けさせ、団結の力  
を強めさせたよう  
だ。ちなみに、自  
治会加入率は現在  
も一〇〇%という。  
いまでもラッシ  
ュ時には超満員に  
なるバスをめぐつ  
ては、かつて他団  
地乗り入れ阻止行

それがなぜ？という問いに、「だまされた  
んですよ」と即座に一言。同じ団地に住む  
職場の先輩に「友人を紹介する」といわれ、  
このこ出かけていった先が自治会の役員  
会だったのである。もうあとへは引けなく  
なり、そのまま自治会二直線。当時、品田  
さんはまだ二十代の若者だった。  
その若さにものをいわせて、品田さんは  
先輩役員さんたちとともに、各ブロックご  
との自治会結成や、  
学校増設、陸の  
孤島化、解消問題  
などに取り組みは  
じめた。

動を起こし、「地域エゴ」と叩かれたこと  
も。「私たちが置かれた状況もわかってほ  
しかった」と品田さんは苦しかった当時は  
振り返る。この問題は新しいバスルート  
設置することによって解決された。こうして団地  
の人々は、自分たちが動けば多くの問題は  
解決の道が開けることを、身をもって体験  
する。

初期のそうした苦勞を乗り越えて、いま  
団地は成熟期を迎えた。まちが安定してく  
ると、人々の関心も地域から遠のく。新し  
く住民となった人たちは、声をかければ協  
力はしてくれるが、積極的に自治会活動し  
ようという意識があまりないのが品田さん  
たちの悩みの種。そこで、連合自治会では、  
「誰もが住みたくなる環境豊かなふるさと  
づくり」をテーマに、「ふるさと左近山ふ  
れあいフェスティバル」を平成元年から毎

●左近山地区のよい点・不満点



年開催。また、サークル活動やバス旅行、  
スポーツ大会などにも力を入れて、地域意  
識の高揚に努めている。  
団地づくりに関わった住民たちの多くは、  
いま高齢期を迎えようとしている。だが、  
ここ十年ほど前から、子ども時代をここ  
で過ごした人が結婚して戻ってくるUターン  
現象が見られるようになった。緑の多い落  
ち着いた環境で自分が育ったように子ども  
を育てたいというわけだ。団地二世の活躍  
に、品田さんたちは大いに期待している。  
自治会人生の品田さんに、家族からの苦  
情はない。一年に一度のスポーツ大会の日  
に、バレーボールのファミリーチームを組  
んで出場するのが、品田さんの唯一の家  
サービス。  
「その時だけはよくまとまるんですよ」と、品田さんは嬉しそうに笑った。

## 第2章

まち

まちに住む

# 「農を生かした都市」へのステップ

◆瀬谷区／相沢  
平本晋一さん(70)



瀬谷の移り変わりを語る平本さん

### 農村から郊外住宅地へ

「この辺りが農村だった頃は、寺や神社が村の中心だったけど、いまでは駅がまちの中心になってしまったね」と、すっかり変わってしまった周囲を見渡しながら、この土地の村からまちへの変化を、平本晋一さんはこう表現してみせた。それはとりもなおさずこの地域が、農村から住宅地へ変化していったことを示している。

昭和三十年代に宅地化の波が押し寄せるまで、一面の桑畑がどこまでも続く明治の頃からの瀬谷の風景に、大きな変化はなかった。宅地のあい間に点在する畑、新しい住宅の間に見え隠れする土蔵や納屋。瀬谷は、いまでも農村地帯の面影をよく残しているまちである。

「かつては、広い畑の向こうに農家がポツポツと見える程度でね」と語る平本さんは、瀬谷区相沢でアパート経営のかたわら農業に従事している生粋の瀬谷っ子。古くからこの地で農業を営む家に生まれた。

農家の子どもに教育はいらないと、いつも学校帰りに畑で待ち伏せしていた父親は、うむをいわず農作業のイロハを平本さんに叩きこんだ。戦前から農業に携わり、平成二年までは横浜南農協の組合長も務め、瀬谷の移り変わりを見続けてきた平本さん。土地は先祖代々、みんなが汗にまみれて働



昭和三十年頃の瀬谷。のどかな風景を流れる小川には、フナやサリガニなど、水に住む生き物たちが豊富にいた。

#### ●まちの名の由来●

瀬谷…旧村名から採った。地名研究で「セヤ」は「狭谷」を意味するという。



瀬谷周辺の悩みは道路の狭さ。住宅が密集しているだけに、道路の幅もままならない

いてつくってきたものであり、その価値は本当は金銭には替えられないものなのだと農家の土地への愛着を語る。

昭和十七年に出征し、終戦直後に戻った当時の相沢には七〇軒ほどの農家があった

が、現在ではわずか六軒にまで減ってしまっただ。 「この辺りが変わり始めたのは昭和三十年代後半のことです。相鉄線瀬谷駅に近いので、畑を潰して借家を建てる農家が増えてきたんですよ」

後継者がいなかったり、相続の過程で土地を手放さざるを得ない人が増えた結果だ。平本さんも畑を三町歩ほど持ち、スイカやサツマイモ、陸稲などを作っていたが、相続で農地をいくらか手放したのを機に、先行きを考えて畑の一部を転用し、アパートを建てた。いまは残った九反ほどの農地に、梅やサクラランボなどの果樹を植えている。

### 秩序あるまちづくりに向けて

「昭和四十五年頃が、農地がアパートに変わったピークだったように思います」

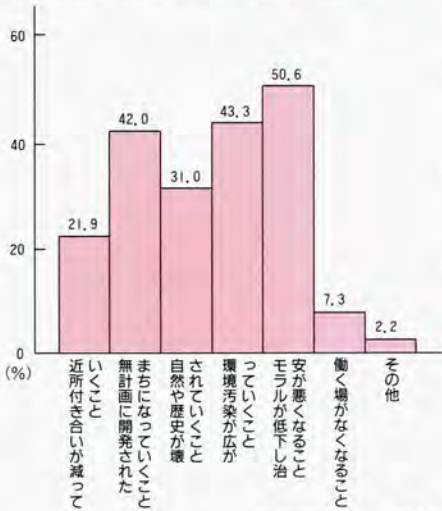
その後、開発は一段落したが、新しく生まれたまちはもともと農地だったところに住宅がそのまま建ったりしたので、道路は狭く、複雑に入り組んでいて、車が通るのに一苦労というありさま。あちこちにわずかに残った畑も、住宅に囲まれて申し訳なさそうに小さくなっている。

瀬谷は新住民の流入とともに急速に発展していったが、まちづくりの上ではさまざまな問題を抱えることになった。

旧来からの農家と新住民との間のこまごました軋轢も、そのひとつだ。

「農家の悩みは、あまりに周りの人が農業を理解していないことです。つい最近

●瀬谷区民が将来へ向けて抱く不安（複数回答）



(瀬谷区民アンケート・平成4年)

そのための布石として、平本さんは市民菜園に農地を提供し、たまに菜園に向いては市民に農業の手ほどきをしている。遠回りのようでも、まず農業の楽しさを知ってもらい、農地への理解を深めてもらいたいから、と。

●瀬谷区の宅地・農地の推移

(固定資産概要調査)



まで、堆肥を作るため牛を飼っている農家があったんですが、その鳴き声がうるさいという苦情があったので、処分してしまっただけです。ビニールハウスのビニールが風に鳴るのがうるさいという苦情もあり、農家は頭を抱えていますよ。また、畑にゴミを投げ込んだり、犬の散歩でフンをさせたりする方もよくいますね」と平本さん。

これは、新住民の農業に対する理解不足が招いた近隣トラブルだが、同様に、無秩序な宅地のスプロール化の背景には、農地を生産活動の場と見るのではなく、宅地用の空き地としてしか考えない便宜主義的な発想が見え隠れする。だが、その土地に息づいてきた人とその営みを大切にしないままちづくりは、どこか根の浅いものになる。

最近では都市景観の上からも、防災面からもまた心身の健康面からも、都市農地の価値が見直されている。農業を正しく都市の中に位置づけた新たなまちづくりを進めようとする動きも見えてきつつある。

農地と宅地がバランスよく配された、秩序ある「田園都市」の実現には、

市民がいまある農地の意味を再確認するところから始めるほかはない。



住宅に囲まれ、都市化の波間に漂う畑。いま、農地と宅地が共栄する「田園都市」の姿が模索されている